

連載

13 在宅医療奮闘記

平成7年より
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長

橋本 満義 (62歳・内科)

“絆”の大切さに感動!!



平成16年のことです。ヘルパーステーションの所長から電話がかかってきました。

がん末期で入院中の女性(84歳)についての相談でした。「ご本人は自宅で人生の最期を迎えたいと願っているのですが退院許可がおりないんです。古くからの友人なので、24時間お世話するつもりですが、退院しても医療面のサポートが必要で・・・」とのこと。

私はいろいろと熟慮し、大変なことではあるけれど在宅医療をお引き受けすることにしたのです。毎日の点滴静注、在宅酸素(HOT)、バルーン留置、吸引療法も必要でした。

生活保護を受けている独身の方でしたが、ご自宅の部屋の壁には、華やかな人生の一面をうかがわせるお茶とお花の名取の免許状が輝いていました。

その後わかったのですが、当院で在宅医療を受けている糖尿病でがん合併の患者さんが、偶然にも彼女の実のお兄様でした。何があったのかはわかりませんが絶縁状態にあったようです。私はなんとかお二人の和解を試みようと思病状を説明し粘り強くお願いをしました。気持ちが通じたのか、看取りまでの4ヵ月の間に3回ほどの涙々の兄妹の再会となり、

お二人からとても感謝していただいたのです。そして6ヵ月後、後を追うようにお兄様も天国へと旅立たれました。

現在では当然のごとくがん末期の治療についても患者さんのデマンド(要望)が大切にされています。

通常は在宅療養が基本です。

今回のように、偶然ですが兄妹の再会そして同じがん末期で看取ることになるとは・・・一体なんなのでしょう。神様のお計らいでしょうか・・・。

「お医者さんが来てくれる」

質の高い在宅医療・看護・介護を『千舟町クリニック』は目指しています。



機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>